

Ed.ベンだより



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiawase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

空洞化する理想

夏休みが終わり、忙しい学校生活が戻ってくる頃になると、毎年、不登校の増加や子どもたちの自殺がクローズアップされる。そして最近では「つらければ学校に行かなくてもいいんだよ」というメッセージが、公私の別なく様々な機関や施設から子どもたちに向けて発信される。3年ほど前に鎌倉の図書館司書の一人が張り出したメッセージは、マスコミにも取り上げられて大きな共感を呼んだ。

夏休み明けに子どもたちが多くのストレスを抱えることは、確かに学校現場の人間は感じていた。ついて行くのが難しい勉強が始まるし、気を遣わなければならない友人関係も急に好転するとも思えない、先生方が妙に元気を演出する運動会も控えている。子どもたちの言葉で言えば「サイアク」なのだろう。こうした「学校の実相」を理解している大人たちの半分は「それでもがんばれ」と励ますだろうし、後の半分は「無理しなくてもいいよ」ということになる。

しかしここで、どちらにも頷けないものを感じるのは、「学校は子どもたちにストレスを与え続けるところ」という共通認識ができあがっていることだ。しかもこの認識が今や全国共通のものとも言える。「学校はストレスを与える」→「だから弱い子どもたちは切り離して守らなければならない」という論理が当たり前になっている事実。しかも、これらの見方が外部からというだけでなく、実は学校の中にもこの論理は浸透している。そして、無理な場合は離脱させて、「それができれば解決！」といった対応がよく見られるようになったのではないだろうか。

そもそも、子どもたちにとって、学校は「ストレスを感じて、離脱者が出てもしようがない」場所に、いつからなってしまうのだろうか。それではまるで学校は、「生き残りゲーム」の格闘技場ではないか。学校は、弱い子どもも、個性の強い子どもも、すべての子どもが居られる場所のはずではなかったのだろうか。でも、知らず知らず、あるいはそうした理念を後回しにした結果、さらには大事なものを置き去りにして進んだ結果、何か「変質」を当たり前のこととして受け入れることになってしまったのかもしれない。ここに、「理想の空洞化」の問題がある。

確かに、「もう無理」と叫びたい子どもは現実にたくさんいるだろうし、「無理しなくていいよ」と伝えることも重要だ。学校だけがすべてではない。でも、それを当たり前のこととして学校現場が受け止めたら、それこそ大変なことになる。だって、子どもは本当は離脱したくないし、がんばりたい。だけど学校が支えてくれなければ、その子たちは離脱し続けるしかなくなるのだから。現実的な対応は絶対必要だ。しかし、その一方で、理想や理念を守り続ける努力も、子どもを目の前に立つ者ほど忘れてはならないのではないだろうか。

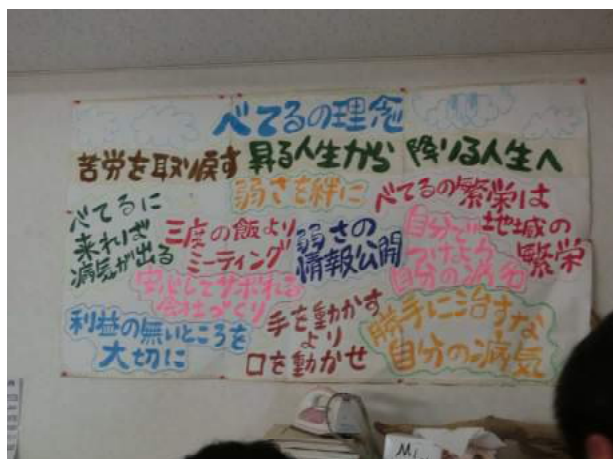
教育問題に関わらず、こうしたことが今の世の中多くなっているように思う。平和、平和といいながら、実は現実に引きずられるかのように理想や理念は空洞化していく。どうだろう、原発の再稼働問題しかり、豊かさを追求してきたはずが、貧困や格差を生んでいることしかり。

第二次世界大戦の終結→冷戦の時代→グローバル化の時代と歴史が動いてきて、今また世界は大きな節目を迎えているように誰もが感じている。「もっと利益を・・・」という声と、「もううんざりだ」という大きな二つの声が聞こえ始め、錯綜している。こうしたときだからこそ、私達は守るべき理想を、理念を、臆することなく叫ばなければならないのかもしれない。

来年の夏休みの終わり頃、「学校に来たくない子どもたちは、先生に教えてね。先生達は、あなたの味方だよ！」というメッセージを多くの学校が出してくれることを、心から願いたい。学校がすべての子どもたちが楽しく学べる場所であることを、子どもたちこそ熱望しているはずだ。私たちは、大人としてその希望に応えなければならないと思うのだ！

<活動報告-「べてるの家」へのスタディツアー->

「一緒に生きる」という理念の実現



本年度からEd.ベンチャーの新しい事業として立ち上げられた「特別支援教育のための学習会」で、夏休みのスタディツアーとして経験されたのが「べてるの家」の訪問である。社会福祉や障がいなどの分野では、「べてるの家」はよく知られた取り組みである。今回の訪問は、障がいのある子どもたちの学校教育を終えた後の生活の可能性を想像してみたいという趣旨で企画され、参加者は5名であった。

「べてるの家」は出版されている書籍も多いので、行われている活動を事前を知ることができるし、それを通して活動を想像することもできる。

しかし、今回の訪問で感じたことは、それらの書かれたものを超越する活動の成果としての当事者たちが、存在感をもってそこに存在しているという事実が、訪問者に迫ってくるということである。学校教育、あるいはその後といった区分に関係なく、「一緒に生きる」ことの一つの姿が、確かにここにあると実感することができるスタディツアーであった。

参加者たちは、「本当に来て良かった」と感じ、「また来たい」「また行きたい」と感じ、この感じはみんなに共通する経験となった。すたんどばいみーから参加した者は、「べてるの家」で行われている「当事者研究」活動を、ばいみー版としてアレンジしてやってみたいと意気込んでいた。学校の教員は、日々の子どもの関わり方に、今とは違うかわり方の可能性があるのではないかと、新学期に向けて新たな関わり方の可能性を模索し始めていた。

インクルーシブ教育、ユニバーサルデザインなどの言葉の広がりの中で、個々人を社会的に隔っている「境界」は、少しずつ取り払われてきている。しかし、その営みは、まだまだ理念にとどまっているように感じる。理念が広まった今、私たちは実践レベルで、それを実現していく活動を行っていかなくてはならない時に来ていると感じるのである。

これからの学習会

■10月スタディツアー 地域家族しんちゃんハウス(子ども食堂)見学

■11月6日(月)理論学習会 文献講読:加藤彰彦著「貧困児童」

■11月9日(木)スタディツアー 事後学習会

■11月25日(土)ママ・パパのための学習会 学習会と先輩の経験談

■12月1日(金)特別支援教育のための学習会 文献講読

■12月4日(月)理論学習会 実践報告「大和の実践」

【理事のつぶやき】当たり前になりつつある、電車の中でのスマホを操作している人々の光景。せめるつもりはないが、なんだか寂しさを感じる。つい最近、電車の中で偶然隣り合った5,60代のおじいさんたちが「携帯を触っていると下を向いてしまうが、携帯がないと私たちみたいに顔を見ながら話せますね」と話していた。その会話を聞いて、インターネットなどを通してコミュニケーションをとれるスマホだが、身近な人と人とのつながりを断ち切ってしまうものだとも感じる瞬間であった。(BT)